

米国内の穀物調達から輸出まで 基盤の拡充と一層の強化

国土条件の制約から、飼料原料の90%以上を輸入に依存する日本。JA全農では、飼料原料の安定的かつ長期的な確保のため、世界各地で独自のネットワークを構築しています。特に世界最大の穀物輸出国である米国においては、現地に子会社を設立して穀物流通の一貫システムを確立。本誌では、飼料の原料調達から供給までの物流にフォーカスし、全5回に分けて各所の概要と役割をご紹介します。

保管能力は全米第5位 CGBエンタープライズ株式会社

JA全農グループの穀物集荷会社として、米国生産者からとうもろこしや大豆を直接買いつける「CGBエンタープライズ株式会社」(以下CGB社)。

1982年の全農グレイン株式会社稼動以降、飼料穀物の買付・集荷は、米国各地の穀物農協連合会を中心に実施してきました。しかし80年代半ば、農業不況の影響を受けた同会は穀物販売事業から次々と撤退したり、穀物メジャーに吸収されました。そこで、JA全農は飼料穀物の安定確保を図り、集荷・輸送・輸出の一貫体制を確立するため、88年にCGB社を買収したのです。

同社の集荷拠点は、米国中西部を中心に90カ所以上、保管能力は560万tと全米第5位を誇り

ます。収穫した穀物の大部分が全農グレイン社を通じて、日本をはじめとする世界各国へ輸出されます。CGB社・全農グレイン社の物流部門は協力してミシシッピ川に浮かぶ穀物輸送はしけを常時約500隻管理。日本へ輸送する大型船にタイミング良く効率的に積み替えています。

CGB社では、特殊なとうもろこしの集荷も行っています。JA全農グループでは91年に残留農薬問題にいち早く取り組み、PHF(収穫後無農薬)とうもろこしの供給プログラムを生協グループと開発しました。また97年以降、米国で作付けが始まった遺伝子組み換えとうもろこしに対応し、PHF+Non-GMO(収穫後無農薬/非遺伝子組み換え)とうもろこしの原料供給を行っています。こうした特殊品の集荷や、品質特性を保つためのIPハンドリング(分別物流)も、CGB社によって行

最大船積能力が大幅アップ 全農グレイン株式会社

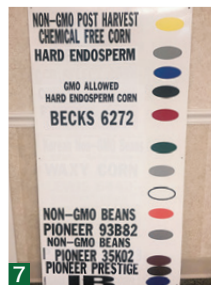
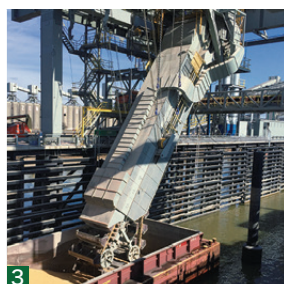
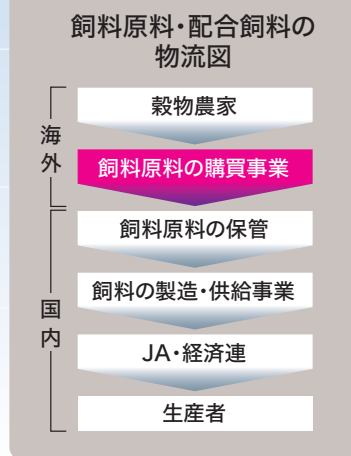
70年代の石油ショックを発端に生じた、飼料原料の高騰。調達面での深刻な影響を将来にわたって回避し、競争力のある飼料原料を安定的に確保することを目的に79年3月に設立されたのが「全農グレイン株式会社」(ZGC)です。同社はCGB社とともに米国での穀物集荷・輸送・保管・船積みまでの一貫したサプライチェーンを築くまでに成長しました。

全農グループは熾烈な競争に勝ち残るために、主産地米国での集荷基盤の強化に取り組む必要がありました。

そこで全農グレイン社は輸出エレベーター(穀物の受入・保管・出荷を行う施設)の拡張工事を実施、

2018年4月より稼動を始めました。今回の拡張工事では、河川側に本船の接岸桟橋を延長。本船待機用バースとして桟橋を整備し、内陸側に2機目のはしけ揚げ設備を設置しました。またサイロに穀物を搬送するコンベアも新設。これにより

受入能力は5500t/時にまで倍増し、本船への最大船積能力は年間13・5百万tから19百万tに増加する見込みとなりました。今後もCGB社とのスムーズな連携で、米国内での飼料原料の購買事業を担い、貢献していく方針です。



1 全農グレイン社の施設全景 2 全農グレイン社が延長した桟橋 3 新はしけ揚げ機(ZGC) 4 本船荷役(ZGC) 5 イリノイ州ネイブルズの穀物エレベーター(CGB) 6 貨物の受入(CGB) 7 IPハンドリングされるさまざまな穀物(CGB)

現地よりメッセージ



たかあき 佐口 尊亮氏
全農グレイン株式会社
穀物次長
ZEN-NOH GRAIN CORPORATION,
Deputy Merchandising Manager

穀物輸出エレベーターにて、日本向けに輸出される米国穀物の船積みや品質管理及び産地情報の収集発信を行っています。私どもの使命は、日本の畜産農家の方々の

ために、より良い品質の穀物を安定的にタイムリーに提供すること。日常から日米両国のスタッフの懸け橋として、コミュニケーションを大切にしており、現地スタッフと協力して予定通りに日本に向けて穀物船を出航させた時には、やりがいを感じます。日本を離れると、日本の畜産物の美味しさを改めて実感します。これからも日本の生産者の方々のお力になれますよう、懸命に業務に取り組めます。

